

隣人愛について

この授業は前半と後半に分かれます。前半に 40 分ほど私がお話をし、その後 10 分間、皆さんの記述の時間を取ります。前半の話の感想や、自分の体験に照らして考えたこと、分かったことなどを携帯で書いてください。その後に後半のお話を 20 分ほどします。その後は残り時間（10 分ほど）などを使って、後半の話の感想や自分の考えなどを書いてください。記述したものは、前半と後半を合わせて、私にメールで送ってください。



今回はキリスト教の「隣人愛」の教えについてお話します。新約聖書の中に伝えられているイエスの「善きサマリア人のたとえ」から、その教えを読み解いていきたいと思います。そのためにまず、このたとえ話が語られた 2,000 年前の中東パレスティナにおけるユダヤ人国家の状況について見ておきましょう。

【イエスの時代のユダヤ人国家】

イエスが生きた紀元 1 世紀のパレスティナは、ローマ帝国の支配下にありました。その支配下でユダヤ人たちはある程度の自治が許されて、ユダヤ人国家を形成していましたが、貧富の差が激しく、ごく少数の裕福な支配階級に、大多数の貧しい民衆(9割ほどだったと言われています)が支配されている状態でした。〔隣人愛_配布資料 a_福音書の重要人物〕を見てください。

民衆は大商人や大地主たちによって搾取されていました。更には、ユダヤ人国家は政治とユダヤ教が強く結びついており、支配層の聖職者や律法学者たちが非常に細かく厳しい律法(ユダヤ教の法律)を作って民衆に押し付けていたのです。貧しい民衆は生活が苦しくて、そんな律法を守ることができず、そのため「神の掟に背く者」として罪人とみなされ、「地の民」と呼ばれて蔑視されました。つまり民衆は宗教的な差別も受けていたのです。これは、律法を都合良く利用した支配体制です。貧しい民衆を差別することによって、支配階級は自分たちの地位を保っていたのです。



たとえば、安息日^{あんそくび}の掟を例として見ましょう。

ユダヤ人にとって安息日とは土曜日であり、週に一度の休日です。しかし今の私たちの休日である日曜日とは全然違う意味での休日でした。ちなみに日曜日を休日と定めたのは実はキリスト教です。日曜日の朝にキリストが復活したので、日曜日を主日^{しゅにち}(主キリストの祝日)とし、休日としたのです。それが日本にも導入されました。

ユダヤ人にとって安息日は「働かなくてもよい日」なのではありません。「決して働いてはならない日」なのです。安息日の掟は旧約聖書の「出エジプト記」や「申命記」に記されており、ユダヤ教の中で最も重要な掟のひとつでした。紀元前 6 世紀ごろに定められたと考えられています。それは驚くほど厳しい掟で、旧約聖書の「出エジプト記」31 章 15 節には、「だれでも安息日に仕事をする者は、必ず死刑に処せられる」とまで書かれています。

この安息日の掟は、神の世界創造の物語に基づいています。旧約聖書の「創世記」の最初に、神の世界創造が語られていますが、それによると、神は 6 日間かけて世界を創造し、その出来ばえに満足して 7 日目にお休みにな

られたのです。そしてこの**第7の日(土曜日)**を祝福し、聖別されました。それゆえ**土曜日は神聖な日**であり、神さまがお休みになられた日なのだから、我々も仕事をしてはならないという掟が生まれたのです。

イエスの時代には、この掟は、日常のごく小さな行為まで厳しく規制するものになっていました。**安息日にしてはならない 39 の禁止条項があり、その条項を守るために 234 の行為が禁止されていた**そうです。〔隣人愛_配布資料 b_安息日の掟〕を見てください。その 39 の条項の内容をうかがい知ることができます。「40 に 1 つを欠く」とはつまり **39** です。「罪^{ざい}祭^{さい}」とは掟を破った者が神殿で贖罪のいけにえを捧げることです。「穀物をひる」とは箕^みであおって屑^{くず}を除くこと、「篩^{ふるい}」は穀物の粗い粒を選り分ける道具です。



ものすごく細かくて厳しい規則だったことが分かりますね。鹿狩りはまあ分かるとしても、2 つの文字を書くのも禁止とは……。生きるために働かざるをえない民衆には、**とても守れないような規則**だったのです。裕福なユダヤ人たちは、外国人の雇い人に仕事をやらせて、自分たちは掟をちゃんと守っていることにしていたそうです。このように、**支配階級の者たちは、到底守れないような規則を民衆に押し付けて、民衆を罪人扱いにして見下し、差別することによって、自分たちの社会的地位を保っていたのです。**まったくひどい話です。

イエスはそんな社会体制に**激怒**しました。**イエスはファリサイ派や律法学者たちと同等の身分(中産階級)の支配者側に属していたのですが、その思想と言動は徹底して民衆の側に立つものでした。**支配者側にだけ都合のよい形式的な律法主義(律法を守る人は立派な人、守らない者は**蔑^{さげす}むべき者**)、そこに見られる偽善と傲慢、そこから生じる民衆への差別をイエスは厳しく批判しました。そして、**人は身分に関わりなく、神の前に平等である**とし、私たちは神の愛によって命をいただいたのだから、**愛の心をもって生きるべきである**と説きました。形式的に律法を守ることが大切なのではなく、**隣人愛を実行することこそが大切なのだ**と主張したのです。**愛の心は、身分に関係なく、誰もが持つことができますから、誰もが救われうる**のです。



イエスは**社会体制に対して極めて反逆的な態度**をとり、安息日の掟をわざと破ってみせたり、神殿祭儀を利用した金儲けを批判したりしました。しかし、律法や神殿祭儀は支配者側にとってはユダヤ社会を支えている柱です。多くの民衆がイエスを慕って集まるようになると、支配階級の人々は恐れをいだき、イエスを、**社会体制を覆^{くつがえ}し、自分たちの地位や財産を脅かす危険人物**とみなすようになりました。そして、イエスの殺害が計画され、実行されたのです。イエスを犯罪人として逮捕し、当時死刑執行権を握っていた**ピラト総督**(ローマ帝国から派遣された官僚)に、ローマ帝国への反逆者として、裁判によって死刑判決を下してもらい、**十字架刑**で処刑してもらいました。第 2 第 3 のイエスが決して現れないように、暗殺ではなく、犯罪人として社会的に抹殺したのです。しかし、その 3 日後にイエスは復活し、弟子たちの宣教によって**キリスト教**が誕生することになります。

【イエスと律法学者の問答】

では、イエスが教える**隣人愛**について見ていきましょう。「ルカによる福音書」の中に記されているイエスと律法学者の問答の一つが、まさに隣人愛についての問答ですので、それを読みたいと思います。〔隣人愛_配布資料 c_善いサマリア人のたとえ〕を見てください。ここに登場するのは、**イエスを敵視している律法学者**です。

イエスが弟子たちと話をしていると、一人の律法学者が立ち上がり、イエスを**試そうとして**質問をしました。

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」これは純粋な質問ではありません。**イエスを試すための質問**です。**いったい何を試そうとしているのでしょうか？** 先ほどお話したように、イエスは貧しい民衆の側に立ち、民衆が虐げられ隣人愛がないがしろにされていることに激怒し、支配階級の人々の形式的律法主義を批判していました。**そんなイエスを、この律法学者は、論駁し、貶めてやろうとしているのです。この「先生、」という呼びかけには、いやみが込められています。**

「永遠の命を受け継ぐ」とは「死後天国に入る」という意味です。天国に行くために守るべき一番大切な掟は何かという質問です。**答を知らないから質問したのではありません。イエスの言葉尻をとらえるために、誘いをかけているのです。**しかしそんなことはお見通しのイエスは、相手に答えさせます。「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるのか。」これは「**あなたはもちろん答を知っているのでしょ？**」という意味です。

案の定、律法学者は愛の掟をすらりと答えました。イエスもすぐに返します。「正しい答えだ。それを**実行しなさい。**」この言葉には、「**あなたは答を知っているけれども、実行していない**」という批判が込められています。すると律法学者は「自分を正当化しようとして」（つまり自分は隣人愛をちゃんと実行していると言い張るために）、イエスに問います。「**私の隣人とは誰ですか？**」これです。**これこそが、イエスを試すための問いです。**イエスがユダヤ人支配階級側の常識をわきまえているかどうかを試しているのです。と言うのも、当時のユダヤ人社会の支配階級の人々は、「隣人」を次のように解釈していたからです→「**律法をきちんと守っているユダヤ人のみを、隣人とみなす。**」



つまり「**隣人**」という**枠**があり、**律法を守ることができる身分のユダヤ人だけが、その枠の中でした。**異民族や異教徒、そしてユダヤ人であっても、**律法を守ることができない貧しい民衆（地の民）は、枠から外されていた**のです。彼らは隣人愛の対象ではなく、**蔑視の対象**でした。この律法学者は、もしイエスが「**地の民も隣人だ**」と言えば、「**律法を守らない者たちは隣人ではない。そんなことも知らないのか**」と、イエスをあざ笑うつもりなのです。

イエスはこの問いに「**たとえ話**」で答えました。それが「**善いサマリア人のたとえ**」です。たとえ話とは、実話ではなく、**イエスが創作した話**です。しかしだからと言って、それは非現実的な話なのではありません。むしろ当時の社会状況が反映された、聞き手にとっては実に現実的な話だったのです。

【善いサマリア人のたとえ】

このたとえ話の登場人物は、当時のユダヤ社会の人々を比喩的に表しています。

- ・「**瀕死**の人(ユダヤ人)」——搾取と差別に苦しむ**貧しい民衆(地の民)**
服をはぎ取られたことが、金品を持っていなかったことを暗に示している。
- ・「**追いはぎ** (ユダヤ人)」——民衆を搾取し、苦しめる**大地主(大土地所有者)**や**大商人**。
貧しい民衆から無慈悲に**搾り**取っていた。
- ・「**祭司** (ユダヤ人)」——貴族(支配階級、富裕層)。貧しい民衆には無関心で冷淡な上層階級の聖職者。
- ・「**レビびと** (ユダヤ人)」——下級祭司(支配階級)。聖職者であり、本来は民衆を助けるべきはずの人。
- ・「**通りすがりのサマリア人**」——**ユダヤ人と敵対関係にあった(互いに軽蔑し合っていた)民族の人。**

傷つき倒れて苦しんでいる人がそこにいるのに、祭司もレビ^{びと}人も関わりたくな
いとばかりに、道の向こう側を通して立ち去ってしまいました。彼らには律法を利用した言い訳も用意されていました。「祭司は不浄を避けるため死体に触れてはならない」という律法があったからです。「死んでいると思った」と言えばすむのです。助けようという心は、みじんもありません。貧しい民衆に無関心で冷淡な支配階級の人々の姿がここには描かれています。



助けてくれたのは、旅の途中の**サマリア人**でした。ユダヤ人と敵対関係にある民族の人です。近所の人でも知り合いでも何でもありません。つまり、**この中で最も助ける筋合いのない人**です。しかし彼はその人を見て「**憐れに思い**」近寄りました。この「憐れに思い」の原語（スプラグクニゾマイ）の意味は「**腸^{はらわた}のちぎれる思いに**かられて」です。上から目線の憐みではありません。**倒れて苦しんでいる人を見て、この人は、人間として、ほうっておけなかったのです。**

そもそも人を助けるという行為は、規則によって行うものではないと思います。それは**心で行うもの**です。祭司たちにとっての規則（律法）は言い訳の道具でしかありませんでした。**このサマリア人を動かしたのは、律法などではなく、人としての心です。**相手がどの民族なのかは関係なく、傷つき倒れている人を見て、思わず駆け寄ったのです。介抱が必要だったから介抱したのです。

このサマリア人の行為について、「あまりにも親切すぎる。知らない人にここまでする人はいないよ」と思った人は多いと思います。デナリオン銀貨一枚は当時の日雇い労働者の一日の賃金に相当するそうです。二枚ですから今の私たちの感覚で一万円くらいでしょうか。それを宿屋の主人に渡し、費用がもっとかかったら帰りがけに払うとまで言っています。**この至れり尽くせりの親切は、当時の貧しい民衆の苦しみの大きさを表現している**と言われています。つまり、これほど手厚く介抱しなければ助からない、それほど民衆は傷つき苦しんでいたのです。

このたとえ話の後、イエスは律法学者に問います。「**この三人の中で、誰がこの人の隣人になったと思うか。**」こういう例をあげられては「その人を助けた人だ」と答えるしかありませんね。しかしこのイエスの問いに注目してください。律法学者のイエスへの問いは、**私の隣人とは誰ですか**でした。イエスはそれをこう言い換えています→**この人の隣人になったのは誰か**



隣人の枠を、イエスは取り払おうとしているのです。限定した枠の中の人が隣人なのではない。自分の親族、恩人、友人、仲間、自分に都合のよい人、利益になる人だけが、隣人なのではない。**愛の心で人に何かをしてあげる時、その相手にとって、あなたが隣人となる**とイエスは言うのです。つまり隣人とは**自分になるもの**です。だから「行ってあなたも同じようにしなさい」とイエスは律法学者に言っています。「あなたも誰かの隣人になりなさい」ということです。**誰もが、誰かの、隣人になれる。愛の心による行いを実行する人が、隣人**なのです。

前半のお話は以上です。これから 10 分間、感想や自分の考え、理解したことなどを、自分の体験などをもとに携帯（スマートフォンなど）で記述してください。全部書き終わらなくても、後でまた時間があります。

【二つの愛について】

隣人愛について、もう少し具体的に考えてみましょう。誰かに親切な行いをする時、私たちはそれをどのように行うのでしょうか。たとえば、電車の中にご老人が乗ってきたとします。すると、一人の男性がさっと席を立て「どうぞ!」と老人に席を譲りました。善い人ですね。でも、この男性の心の中をちょっと覗いてみましょう。もしかしたらこの人は、自分に何か見返りがあることを期待して老人に席を譲ったのかもしれませんが。あるいは周囲の人に良いところを見せて、自分の好感度を上げるために席を譲ったのかもしれません。



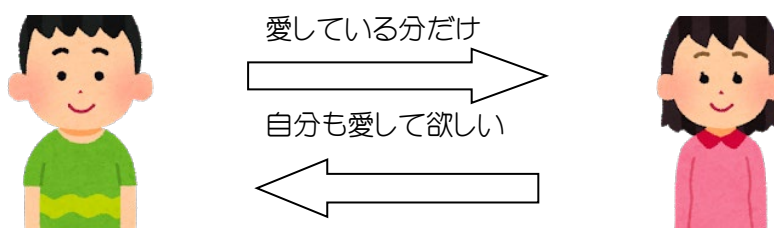
もしそうならば、彼の行いは真の意味での「隣人愛の行為」と言えるのでしょうか? その行為がもし計算づくで、打算的なものであるなら、相手の老人は、行為の「目的」ではなく、別の目的のための「道具」・「手段」となってしまいます。別の目的とは、「自分の利益」です。こうなると偽善的な感じがしますね。「たとえ偽善でも、する方がしないよりも良い」という考え方もありますが、純粋な意味での隣人愛の行為とはやはり区別されるでしょう。

<求める愛>

それほど露骨ではないにしても、私たちは日常、自分の良い行いが巡り巡って自分の利益となって欲しいと思うことはあると思います。「情けは人の為ならず」というやつです。また、自分がしてあげた分だけ、相手にもして欲しいと考えることもあると思います。これはおそらく誰もが持っている心情でしょう。いわゆる^{ごしゅう}互酬性(互恵主義)による相互関係です。やってあげた分に見合う報いや見返りが欲しい。損はしたくない。自分が相手に持つ愛情と同じ大きさの愛情を、自分に対しても持って欲しい…。誰もが多かれ少なかれ持っていると思われるこのような愛を、「求める愛」と呼ぶことにしましょう。これは非常に^{ごけい}人間的な愛だと思います。

しかし、こういう交換条件的もしくは打算的な「求める愛」は、残念ながら、人間関係をぎこちなく、せちがらいものにしてしまう側面を持っています。人にしてあげる行いが、結局はすべて自分の利益、喜び、満足のためとしたら、それは利己主義と言わざるをえないでしょう。皆が自分の利益しか考えていないなら、そこに人と人とを結びつける^{きずな}絆は生まれにくいと思います。もしクラスや部活のメンバーがそれぞれ自分中心の勝手なことをするなら、グループとして全然まとまらないでしょう。団体競技なら試合に勝つのはまず無理でしょう。

このことは、友人関係や、彼・彼女の関係においても同様です。愛する人を求めることは、確かに人と人とを結びつけますが、しかし、もしそこに「求める愛」しかないのであれば、そして、自分がしてあげた分だけ自分にも返してくれることを常に求めるなら、そこには緊張関係が生まれます。そして、このような「求める愛」が高じ、さらに自分だけを愛して欲しいという独占欲も加わると、束縛関係にさえてしまいます。すると、ぴんと張った細い糸のように些細な傷でプツンと切れてしまい、関係は破綻してしまうのです。仲の良かったカップルが突然別れたり、親友同士だった二人が急に絶交したり…。「求める愛」は誰もが持つものだと思いますが、人をさもしくしてしまう面があります。求める愛によって人と人の結びつきが壊れてしまうこともあるのです。人を結びつけるようでは、必ずしもそうではないのが、「求める愛」です。



これが高じると束縛関係に…そして破綻。

<与える愛>

しかし、私たちは「求める愛」しか持っていないわけではありません。自分の利益のためではなく、他の人のため、あるいは皆のために何かを行う愛も持っています。奉仕の精神や、思いやり、気くばり、心くばりなどがそれです。これを「与える愛」と呼びましょう。この愛があるからこそ、社会は円滑に回っているのではないのでしょうか。クラスでの活動や部活などを考えてみれば分かると思います。集団の中の人間関係がうまくいっている時、皆の心が一つになっている時、きっと誰かが「与える愛」を発揮しているのです。その愛が潤滑油のように働いて、関係を滑らかにし、人と人を結びつけているのだと思います。災害時のボランティア活動などもその一つと言えるでしょう。このような「与える愛」が、実は人間関係を根底から支え、社会を支えているのではないのでしょうか。



「与える愛」は、特殊な能力ではありません。一部の人だけが持っている特殊な愛ではなく、誰もが持つことができる愛です。思いやりや気くばりは、本来、誰にだってできることです。与える愛を持つことは、不自然なことでもありません。人間にとって、むしろ自然なことです。つまり「与える愛」も、人間的な愛なのです。

与える愛は人を輝かせます。人間としての気高さ、美しさ、神々しさはこの愛から生まれるのだと思います。心を照らし温める光のようなものです。

ただ、「与える愛」は人によって多かったり少なかったりするようです。自分は「求める愛」ばかりだと感じた人も多いのではないのでしょうか。「与える愛」は、誰もが持つことができますが、いつも持っているとは限らないようです。何かのきっかけで、心に湧き出てくるものなのかもしれません。

【愛の温泉】

その意味で、「与える愛」は温泉に似ていると私は考えています。自然の中に湧き出る温泉のように、「与える愛」は人の心の中に湧き出るのではないのでしょうか。そして、温泉が人の体を温め、癒し、元気にしてくれるように、「与える愛」は人の心を温め、癒し、元気にしてくれるのです。では、与える愛はいつ心の中に湧き出るのでしょうか。おそらく一番よく湧き出るのは、自分自身がすでにその愛を受けていることに気づいた時ではないかと思います。つまり、自分が他の人から「与える愛」を受けていて、その愛に生かされているということを実感した時に、自分の心にも「与える愛」が温泉のように湧き出てくるのではないかと思います。

そして、温泉と同様に、「与える愛」は、人と分かち合えるのです。温泉に誰かと一緒に入って「気持ちいいね」と温かさを分かち合えるのと同様です。両親、親族、恩人、友人など、周りの人たちから私たちは「与える愛」をたくさん受けてきたと思います。そんな自分と同じように他の人たちのことを尊重し、互いに助け合い、愛を分かち合うこと、これが与える愛による隣人愛です。キリスト教においては、神の愛によって私たち皆が存在を与えられているという考え方から、神の愛が第一の「与える愛」です。



「与える愛」の中に生きているからこそ、私たちはお互いに「与える愛」を分かち合うことができるのだと思います。愛によって生きている私たちの「愛の分かち合い」、これこそが、隣人愛の基本なのです。

今日のお話は以上です。授業内容についての記述は、前半と後半を合わせて、メールで私に送ってください。提出期限は、今日の23時59分までです。